〔花月草紙四〕いまこゝにては、くろきをすゞむしといひ、かきのさねのごとなるを、松むしといへど、もとはりん〳〵となくはまつにて、ちんちろりとなくは鈴なるを、あやまりにけりともいふ、むしうるかたへ行きて、松のを得んとおもはゞ、鈴のかたをといふなり、

〔古今要覽稿蟲介〕松むし　金琵琶　鈴むし　金鍾兒

松むし鈴むしの名、萬葉集にはみえず、延喜の比よりぞ物にもみえたる、さてこの二蟲の名、古今のたがひ有、延喜の比はチンチロリンとなくを松むしといひ、リンリンとなくを鈴むしといひけり、忠峯ぬしの西河行幸和歌の序によりて志られたり、源氏物語の比よりこのかたは、リン〳〵と鳴を松むし、チンチロリンとなくを鈴蟲といふなり、諸書にみえたり、志かれども江戸及び諸國にては、今も古名を唱ふる人も有、とふるなり、京都にても近世はまれに古名を

〔傍廂前篇〕鈴虫　松虫

色黑くして、首ちひさく、尻大にして、背すぼみ、腹黃白色にして、リ、リンとなくを、鈴虫といへど、これ松虫なり、そは松風の音に似たる故の名なり、〇中略松風の琴の音にかよふと、歌にもよめるなり、たゞドウ〳〵とふく風の音のみならば、松に限るべからず、松風に限りて琴の音にかよふは、リリリインのひゞきあるゆゑなり、

〔夫木和歌抄十四蟲〕延喜七年亭子院御門御時、西河行幸せさせ給けるに、忠峯〇壬生新和謌序云、ひるはひぐらし虫をもとめ、夜るはよもすがら、そうのこゑをとゝのへしめ、あるときには、山のはに月まつむしうかゞひて、きむのこゑにあやまたせ、ある時には、野べのすゞむしをきゝて、谷の水の音にあらがわれと云々、

〔伊勢集上〕いまは男を心うかりてみやづかへをなんしける、きさいの宮の御こゝろ、かぎりなくなまめき給ふて、世にたとふべくもあらずなんおはしましける、此人さうしには前栽をうへてなん住ける、秋里にまかでゝあるに、かの宮よりなどかまゐらぬ、まゐれ、花盛も過ぬ、松。